
I S Insincere • story ~ふざけたオリ主の転生録~

見ろ！作者(主に頭)がゴミのようだ！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS Insincerestory ～ふざけたオリ主の

【転生録】

【コード】
N4393BA

【作者名】

見ろ！作者（主に元頭）がゴミのようだー！

【あらすじ】

テンプレート転生者？いやいやいらないよ、俺は今を生きるのが楽しいんだ。ゆっくりまつたりふざけて生きるのがね。えつ？意見なんて聞いてない？いや、聞けって
ちゅっ、おま、うわなにをするやめ アッ――――！

「ハングブレチート転生？ フフフ、 フハハハハハハ！！ 我が世の春が来た」 「うわさ

あらすじに書いたようにハングブレ（笑）チート~~~~転生者（爆）
ものです。えつ？ ちょっと違う？

……ハハハ、 ナニヲイツテイルカワカラナイヨ。

そんな駄文なので原作を持つてないと表現が足りなくてわからない
場所が多くあります。お気をつけ下さい。あと、感想とかで誹謗、
中傷とか書くと泣き田見ることになりますよ？（俺が）

そんなわけで駄文ですがそれでもよいと言つなりよひしくお願いい
たします
ではどーぞ

「トランププレチート転生？ フフフ、 フハハハハハハ！ ！ 我が世の春が来た」 ついで

「こんな夢を見た。

今日もいつもと同じように朝起きて、いつもと同じように登校し、いつもと同じように友人と駄弁り、いつも同じように樂しあった。

「 と

そして漫画にあるような、小説にあるような、B級の映画だろうが、田曜の朝にでもやっている、特撮のような非日常は、当然ない。

「 ですか」

そんな口常に満足していた俺は、「あ～、一度でも良いからラノベの事件とかに巻き込まれてみたいよな～。お前もそう思うだろ？」

と言つた友人と、

「そんなわけ無いだろ。それに俺はこいつやって皆で楽しめてるだけで十分だよ」「まあ、お前の場合はな～。もう少しあいその楽しみ寄越してくれたつていいじゃんかよ～」などと会話して、いつものように歩き出した。

……思えばこの会話がフ…いや、何でもない、気にしないでくれ。

「　いい　に　　せい　！」

ちなみに俺は何処にでもいるようなありふれた高校二年生で、ぶつ
ちゃけ顔は平均より下だと思う。

彼女も今まで出来た事がないし、告白した事も、された事もないか
ら何時もリア充爆発しねーかなーなんて考えているどうしようもな
くありふれた非リア充の一人だ。

まあ、ウチの学校は色々とおかしいんだけど…それはまた今
度でいいだろう。

で、結局友人と別れて何時も通りの一日を終え

「いい加減起きろツツッてんだろオガツ！－！」

スッパアアアアアアン！－！

「がアツツツ！－！」

る事もなく勢いよく振り抜かれたハリセンの音と共に俺は盛
大に舌を噛んだ。

「～～～～～～～！」

うん、もう現実逃避は止めようか。だって現実に御坂○琴みたいな
やつがハリセンを持つてるのを見たら頭疑われるよ？しかもここ目
に悪くない程度に真っ白くて何もないし、全くどこのテンプレだよ。
黄色い救急車来るよ？自分で自分を疑わないとやってなんないんだ
よ……

「やつと起きた？アンタ火事の中でも起きなさそうね。それより、
この偉大なる創造神様に選ばれたのよ？感謝の言葉でも述べたらど
う？」

意味わかんねえ……

何こいつ……いい加減にどつか行つてくれよ……

「アンタ言つに事かいてどつか行けですつてー?そもそも私は

」

え?何?状況が把握できない?

じゃあ回想スタート

「ちょっと、聞いて

」

友人と放課後歩き出して　もとい帰り出してからしばらくたち、会話が途切れた頃にそれは起つた。

(うわ、あれ危ないだろ…)

俺が見たのは小学生にもなつてないような幼女が道路の真ん中を歩いている光景。ご丁寧に後ろからスピード違犯的な速度でツーツクツクがやって来ている。

これはまずいと一瞬で判断した。勿論俺は見知らぬ幼女のために命を投げるような聖人君子でも、紳士でも、ましてやお人好しでもない。ただの高校生だ。まあそりや子供がトラックに轢かれるのなんか見たくないが命まで張ろうとは思わない……何がまずいかと言うと

「テンプレ来た!!これで勝つる!!」

このよく分からんテンションの友人だ。そのまま幼女に駆けて行き優しく（？）歩道まで突飛ばした。そして不様に転んでいる。

「クソツ…まともに走る事もできないくせにツ…！」

今度は見知らぬ幼女はともかく、流石に親しい友人まで亡くしたくないので、俺は走り出した。そしてその勢いで友人を蹴り飛ばし、罵倒を浴びせながらトラックを待ち勢いよく

伏せてトラックの下をぐぐり抜けた

テンプレかと思つたか、ハツ、甘いわ…！

そんなわけで周りの拍手やらなんやらを受け流しながら俺と友人は帰つた

え？ふざけんな、テンプレはどうしたつて？
いや、テンプレではないんだよ、困った事に。
まあ焦るなつて、続きはあるんだ。
じゃあリスタート

その後俺は一人暮らしの家に帰つたんだ。高校になってから親が二人共同じ場所に単身赴任つていう謎の状況が生まれてね。そして炬

煙でぬくぬくと一人で蜜柑を食べて居たんだ。

「　　見つけ　　」

そんな声が頭に響いた途端、

「　　ツ！？」

蜜柑が喉に詰まり、

ガシャン！

飲み物をこぼし、

ドタッ！

水道に向かう途中で転げて、

タンスの角に思い切り頭をぶつけ、

ガニッ！

ゴロゴロッバタッ！

階段から転げ落ちて意識が朦朧としたところでも蜜柑のせいで窒息死。

……笑えよ、笑えばいいじゃないか…

いまわの際にそんな事を考えていたらあのよくわからない空間にいたのさ…

「うん?」は?俺はさつき、ひどい目に会つた気が

そこで何かをこらえるような声が聞こえたので振り返って見ると、

「ふくく、アンタ、私を、笑いで、こ、殺す気？」何かよう分からん御〇美琴がいた

で？結局俺は何に選ばれたんだ、創造神さまよ？」

「アンタ、面白かったから書類の寿命をちよちよと変えて私に会いに来るようにならしたのよ」

What? 寿命? 誰の?

「勿論アンタの」

面白かった？何が？

「アンタの生活の色々なところが。そうね、特にアンタがよくやつてた『悪戯』『おひらね』かしひね

まさか……見られてたのか？

「その気になれば何でもできるモンよ。なんたって神だし?人の思考を見抜くなんて朝飯前、ましてや気になつた奴の生活を見るなんて呼吸するようにできるわ」

あれ?確かに俺あんまし喋つてないな…

「で、結局何なんだよ、たかが悪戯小僧一人に会うために連れてきたんじゃ無いだろ?要件はなん「会うためよ?」……は?」

「だから会うためだつて」

は?こいつ頭大丈「聞こえてるわよ」……チッ…

つーか創造神(笑)がこんなやつで「……燃やしてやろうかしら、刻んでやろうかしら、潰してやろうかし「どうなさつたのでござひこましようか、我らが崇める創造神殿「フン、まあいいわ危ない危ない。考えるのにも自重が必要だな…

「けど、たかが『悪戯』と言つてもアンタのは桁が五つか六つ違うわよ? あれ傑作だつたわね。確か、浮田、とか言つたつけ?

あの教師、アンタのおかげで病院送りよ? 檻の付いた…」

…あれはあいつが悪い。確かに小学生の頃、だつたか…あいつはロリコンだつて噂が流れてたんだ…いやいやいや、たつたそれだけで人壊す程俺は下衆じやねーよ…? ……その噂が気になつた俺はちよつとした隠しカメラであいつを追つてたんだが…まあ、噂みたいな屑だつたんだよ。…おかしいとは思つたんだ。授業後はすぐ消えるし、大体小学生がそこまでタチの悪い噂を流すはずがない…

まあそれは よくないが 流すとして、それを見た俺は少しばかりキレて『悪戯』をし始めたんだ。…まあたったそれだけだよ、うん、それだ「まず手始めに教師の下駄箱を超強力な電磁力にして開かないようにして足止め、家に先回りしてセンサーの前を通してたら何度も家具が倒れるようにナノサイズの機械を家にばらまき、一日かけてその家だけが揺れるように、外から見てもわからないう地震を発生させる装置を開発、設置。靴を超反発素材を使った偽物の嫌がらせ仕様（極疲労バージョン：一歩歩くとその度に足裏に力が反発して返ってくる）にして学校のデスクに」

「わ、わかったからやめてくれよー。」

「何よまだ七%よ？」

「もういい…」

そんな感じで一切証拠を残さずに色々やつたんだけど…まあいこよね？相手は口リコンだし

「よく言つわ、『みんなが気に入らない教師だから』で今もやつていたくせに」

1時間経過

「さて、創造神サマ～もつ帰つていよいよね？」

「そうね、結構楽しめたし。帰りたいの？」

帰りたいのつて…

「そりゃそうだよ、あの家にももう十七年近く住んでる。いきなり拉致されたんだし、それに蜜柑、まだ食べ終わってないしね。ハハハ…。それにあんたら帰れないなんて言わないだろ?」

「まあそうね、あんたが死んだことはなかつた事にすればいいし。うーん、けどなあ、一度神に関わった人間はもう一度とその神と直接関わらないんだよね…」

「そつか、じゃああんたとはこれで最後か。もう人殺したりなんかすんなよ?じゃあな

「

「ところでアンタ、『悪戯』好きみたいだけど、された事つてあるの?」

あれ?なんだこれ…

「いや、された事はない。まあ俺は良くも悪くも注目されないみたいでな

ツ!/?口が勝手に!?

確かに俺は注目されないが…

何か嫌な予感がする……俺はそういうのはあまり信じない派なんだけど

「じゃあ私も『悪戯』してみよっかな?」

あいつが笑い、そつ言い切つた瞬間に俺は後ろ一、三十メー

トルぐらごにある扉に向けて走り始めた

「ほらほら、速く走らないと扉に入る前に捕まっちゃうよ・フフフ、
帰れなくなっちゃうよ・フフフ……どこへとは言わないけど、ね

』

扉をくぐれば帰れるよ

あいつは嬉しそうにそう言っていた。なら速く帰るために、早く逃
げるために。

『嬉しそうに』？

つてまさかッ！？

俺は確信を得て止まろうとした。しかしその時にはもう遅く、俺は
扉を勢いよく開け放ち、その奥に飛び込んでいた。しかし扉の奥に
床はなく、宙に投げ出された俺が最後に見たのは『悪戯』が
成功して輝かんばかりの太陽のよくな笑顔と

『もとのせかい』とまるっこい平仮名で書かれたプレートが
かかるここの神の向こうにある扉だった…

「うん？ 確か今回は初めて騙されたんだっけ？」

真っ白の次は真っ暗か……いや、俺の姿が見えるから真っ暗じゃなくて真っ黒か……。どうでもいいな……。

「とこづ訳で、よく来たわね、いらっしゃい。」

「こや、まづいいだよ……」

「あれ? 見えない? じゃあ、」

そんな声と共に下手な指パツチンが響き周りが真っ白になつた。そして辺りを見回してから俺は後ろに下がり、神から一十メートルくらいこの場所から、

タツタツタツ、

走り、

ダンッ!

思い切りジャンプし、

クルクル、

回転をつけてから姿勢をつまく調整し、

ズザツ!

土下座をした。

「帰して下さいお願ひします」

「いや、今のそれ何よ……」

は？ジャンピング土下座だろ？綺麗にやればたとえ神だらうと願いを聞かずにはいられないっていつ……

「えー……なにそれ……」

俺の前方一回転右方三回転土下座が通用しない！？
クソッ！高校では『悪戯』した奴ですら許してくれる究極の土下座として知れ渡っていたのに！？

「いや、知らないわよ、そんな事」

……仕事しない一ノートのくせこ……

「失礼ね、私にだつて仕事はあるわよ。 そうね、例えば死んでからこの『転生の間』に迷い込んだ魂を転生させたり……」

「おいおいおい、できない事はないんだろ？だつたら」

「無理無理、ここ輪廻から外れてるから まあもと世界に無理矢理戻そしたら、うーん、多分良くて記憶がない状態で全く別人、悪いと世界の修正力で魂ごと消え去るわね」

できない事はないって何だつたのを

「それは…あれよ、今すぐアンタの魂をコピーしてもとの世界に送り付けた後、他の管理者に見つかる前に本物を私の世界に隠してみ

たり……」

「何だ？今さら人一人巻き込んで『ばれない反則は高等技術』とかぬかすのか？つーがあれか？つまり私にできない不正な事はない、と？」

「ええ」

スッパアアアアアン！――

「――――――――――！」

神が未だに持っていたハリセンで思い切り叩いたが、どうやら神も舌を噛んだようだ。しかし、今はどうでもいい。

「胸張つて言える事じゃねえから！大体何だよ、不正な事つて！？普通にやれよ！？あんた神だろ！？」

罵倒、三時間経過

「まあ、じんなもんでいいだろ。おい、取り敢えずあんたは――」

「『じんなさこ』『じんなさこ』『じんなさこ』『じんなさこ』『じんなさこ』『じんなさこ』……」

あれ？目が濁つてゐるんだけど……

「つておいー？大丈夫か！？」

「「」めんなさこ「」めんなさこ「」めんな……はつ！？私は何を……？」

「まあ取り敢えずそれはおいといて、なああんた、俺にはどんな選択肢が残ってるんだ？」

「そうね、転生か消えるかじゃない？」

考える素振りも見せずに即答つて……それなら最初から言ってくれよ……

「それって選択肢がないって言わないか……？まあいいや、おい神、俺はあんたのせいで転せ「あ～はいはいテンプレテンプレ～」まあいいや……それなら少しくらい特典とかくれんだろ？」

えつ？てめえテンプレが嫌いなんじゃねえのかつて？

まあ確かに好きじゃないけどさ、少しくらい俺だって憧れるんだよ。だってさ、ほら ロマンがあるだろ？痛つ！やめつ！石投げないで！

「まあ私が殺したんだし……世界を壊さない程度ならいいわよ？」

つて範囲広ッ！？

まあいいや

「じゃあ俺がゲームやラノベで知った呪文を使えるよつとしてくれ

「えーと……ドラクエシリーズ、FFシリーズ、テイルズオブジアビス、f a t e / s t a y / n i g h t，とある魔術の禁書目録つ

て言つたといふかしひっ?」

「まあそんなところか……俺って意外と結構少なかつたんだな。まあメタルギアとモンハンにはまつてたし……」

「で、他は?」

えつ? 他?

まだもらえるのか……いや、ちよつと待つた

「俺が行く世界はどんな世界何だ?」

「……考えてなかつたわね。じゃ、ここから選んで?」

だからできない指パッチンをしようとするな、つておい!

「これ俺の部屋の本棚じゃねえか!」

指パッチンが鳴らなかつたと思つたら俺の本棚が出てきた

「刀語、うみねこのなくこに、ひぐらしのなくこに、めだかボックス、NARUTO、ワンピース、バカとテストと召喚獣

「

改めて見るとジャンルに統一性が無さすぎて……

「うーん、じゃ、これで

俺が取り出したのはHIS インフィニット・ストラタス
何故かつて?

金欠で六巻までしか買えなかつた恨みを晴らしたいからだ」

「やうだ、あと主人公とは違う歳にしてくれ」

「何で？せつかく原作を生で見れるのに。それに原作の知識があれば厄介事もなんとかできるんじやない？」

「いや、一次創作のオリジナルの主人公を見ると……どんな状態でも主人公と関わる羽目になるだろ？だからせめて……な？」

けど違う歳ならエレ乗れない限り大丈夫だろ？

乗れたとしてもエレに触らなきやいいんだ。興味は有るけど魔法や魔術のロマン溢れる生活には変えられない！

「あつ、そうだ。アンタの名前や性別は？今なら決めさせてやるけど？」

「いや名前は変えなくていい。親がくれたこの名前、結構気に入ってるんだ。もつとも、ありふれてはいるけどな。あと俺は男を好きになりたくはないからな。男で頼む。」

「オッケー、じゃあもうこいかしら？」

「大丈夫だ、問題ない。」

「…………そろそろ足が痛い。立つているだけとはいっても三時間以上はな……」

「じゃあこっちのドアからね」

「わかつた」

よし、こつから俺新しい人生の始まりだ！…少しだけ前の生活が心残りだけど、ネガティブになつても仕方ない。これからに期待を寄せて生きて行こうぜ！！

「政治小説の歴史」

「ああ」と、手が滑った

パ
カ
ツ

「つて、うわああああああああ！？」

地面が落とし穴とかそれなんてテンプレ

「『めん』『めん、私『悪戯』が大好きになっちゃったみたいでさあ』

大声を上げて落ちている筈なのに、周りはやけにゆつくりに見え、その声ははつきりと、嫌な予感と共に聞こえた。

「特別サービス 原作にいっつぱい関わらせてあげるよ」

二〇

「クソ駄伸がア———！！」

ドチャツ

「おお転生者よ、死んでしまつとは情けないwwwまあ、今回だけは生き返らせてあげるよwww」

一体誰が殺したと

一瞬で生き返った俺の意識は再び闇に沈み

新しい、俺の人生が始まった

「テンプレート転生？ フフフ、フハハハハハハ！！ 我が世の春が来た」 ついで

ハハハ、やつちましたZE
ありふれたテンプレを書こうと思つていたら指が勝手に動いたんだ
！ 何を言って（『』）
こんな駄文（中略）よろしくお願ひいたします

はじめのまほつ～達人編・これで君もネクロマンサーだ～（前書き）

ちょっとだけ調子に乗りすぎました。

え？ ちょっとじゃない？

……反省はしている。だが後悔は（r y

ネクロマンサー www

一話で出した原作を知つていればわかってしまいしますね。

反せ（r y

ではビード。

ほひめでのまほつ〜達人編・これで君もネクロマンサーだ〜

「キョウモイイテンキダナー」

「誰だつて？いや、俺だよ俺俺。え？いやいや詐欺じやないよ？前に一回死んだ俺だよ。

にしても今まで大変だつたわ〜、喋れるようになるまでずっと羞恥プレイだぜ？」

「一応生前？前世？も一次創作とか好きで転生物とか読んで知つてたけど、やっぱりかなりキツイものがあるよね……
恥ずかしいからちょっと拒否すると

「大変よ！悠夜が食欲がないみたい！どうしましょ？あなた！」

「なんだつてー！？じゃあまず病院かー？それとも

「

うん、ここまで騒がれると罪悪感すらでて来るよね……
まあしつかり飲まないといけないのは知つてるんだけどさ。はあ……

そんなこんなで喋れるよつになつてから（まあ二歳くらいだからだ）
頑張つて親とかがいない場所を、俺はついに作り出したんだ！！

そんな事をしてどうするのかって？

フツ、俺は今までロマンを求める、科学ではあり得ない現象を引き起こす事を望み、憧れていたのだよ。

俺したい事はただ一つ、それは

そう、憧れていた魔法・魔術の詠唱だ！！俺は今から憧れだつた魔法を唱えるッ！！

ヒヤツツツホオオオオオウ！！！

いや～頑張ったよ。知識もろくにないくせに親に見つかれないように人払いのルーン（詠唱とかはなくて地味だけどこれも一応魔術の一つだな）を落書き帳に書いて家の周りに置いて来たんだ。

そして庭先に出て準備万端の今詠唱するお気に入りの一発は

『天光満るところに我はあり、黄泉の門開くところに汝あり、出でよ！神の雷！』

いや、この時点嫌な予感はしてたんだよ？だってこの秘奥義はアビスだったら一発の威力は最高だったと思うし。まあつまり

『インディグネイション！』

ドガアアアアアン！！！

山が半分、消滅しました……

いや～流石裏秘奥義、いい威力してんな～

…………違うよね。いい加減回想で引っ張るのやめようぜ、俺（作者）
。

やべえ……危なかつた……もし近くにやつてたら俺死んでたんじゃね？

つてそれでもない！！

これが発端でもし俺が魔法を使えるなんて知られたら

！！

「つてあれ？体が……凄く……ダルいです……」

これは何だ？一気に強力な譜術を使用した反動か？

「待て、少し休ら。後処理しないと……バレ……たら……」

急に襲つて来た眠気を退けることも出来ず、俺はそのまま庭先を倒れるよつて寝てしまつた。

「う……ん……？夢……だつたか？まあいいや、テレビでも

「…………今日の2時頃〇〇市で原因不明の雷による災害が起つりました。負傷者は奇跡的にいませんでしたが原因は専門家にもわからず、いまだに調査が難航しています。なおこの雷は〇〇市の小さな山の半分をさせており」「プリン

俺はテレビを見なかつたことにして一度寝始めた。

「おき　お　て　にいわ　」

「…………ふあ～、ん？何だ、何か用事か、妹よ」

「わいわいまだよ？にこねと」

何だもうそんな時間が。

確かあの悪夢のよつな「コースが三時頃だつたから……一度寝でそ
んなに寝るなんてあの譜術はどれだけの負荷があつたのだろうか……
まあ、今はもう倦怠感もなくなつているから大丈夫そうなんだけど。

ちなみに俺も妹も既に二歳だ。俺は双子の兄で、俺はともかく妹は
喋れるようになつてからそんなに経つてないと思うんだけど、偉く
しつかり喋れているような こういうのつて最初はたどたどし
かつたりしないか？ まあそれはただの偶然だろう、きっとウ
チの妹が賢かつただけだ、人物なんて関係な

「悠夜、千冬、早くしないとご飯冷めるわよ～」

「この世界は俺が嫌いなようだ……まあ仕方ないよね、あの
神の世界だし……

このまま現実逃避をしていてもしようがないので説明すると、IS
の世界の主人公、織斑一夏の姉の織斑千冬だ。俺はその双子の兄、
つまりまんま主人公の兄貴なんだよ……。だとすればそんなにモブ
キャラから一線を画した重要人物にスポットライトが向けられない
ことがあろうか？いや、ない。

そして俺の無邪気なロマン溢れる魔法・魔術ライフのステージは幕
を開ける前に核爆発で消し飛んだ……

え？普通に魔法使えばいいじゃんつて？そんなことしたらばれた瞬
間良くて『よし、その不思議な力を実験DA世界のために犠牲に
なれ 人体実験END』か悪いと『あいつはきっと危ないやつだ
世界の危険をやつつけろ 正義の暗殺ミッションEND』が腹抱え

て大爆笑しながら待つてるだろ？

何せ原作では男で「I」を使える一夏に正面から『実験させてくれ』と言つような世界だ。まして魔法だなんて言つ未知の力なら誰もが欲しがるか危険視するだろう。

それに俺は主人公の兄貴みたいだしひつそりと逃げて暮らすとか無理な気がするし。

だから、俺は「I」と「生隠すこと」を決定した。

と、言つてもばれない程度には使うけどな。

「にいさん……いいかげん」はんたべよつよ……」

ヤベっ忘れてた

1年後

今日から幼稚園に通うんだけど……

うん、あれ何だうね……みんな自己紹介してると一人パソコン弄つてね？誰かはわかるよ？どうせ『へんじがない。ただの天才のようだ』ってメッセージが出るだけで会話はできないと思うけど、篠ノ之さん家の東さんでしょ？さすがになんとなくわかるよ……

うん、けど幼稚園児がウインドウを何個も出して高速でタイプしつ

つ、名前だけ簡潔に語つて自己紹介ってどう?」

結構シユールだぜ……?

「おつむりがふむです。すきなものはかぞくです。みんなとなかよ
くしたいです。」

ほら、千冬も可愛らしく自己紹介をしてるじゃないか。もうちょい
園児らしき自己紹介できんのかね、あのみんなのアイドル束さんは。
もしかしてあれ?固有スキル『他人嫌い』つてもう発動してんの?
早すぎねえ?他人に見切りつけんの。何があつたのかは知らないけ
どとにかく早かつたら千冬だつてまともに会話できないんじや

「ちーーーちやーーーん!…!…!…!…!…!…!…!

すこません俺が気づいてないだけでかなり親密だつたようですね。

千冬を知らないから無視してんじゃなくて、千冬に気づいてなかつ
ただけか。

あ、先生、これは止めようとしたい

「あの、束ちゃん?今はみんなが自己紹介してるから

「つむせいな、今束さんは一ちゃんと話してるんだよ?見てわか
らないの?わかつたらじやまだからあつち行つて」

あーあ、言わんこつちやない。こんな空氣じや滅茶苦茶自

己紹介しずらいんだが…

他の園児なりやつと空氣なんぞ読めなくてそのままこけるんだが
が……

ええい、ままで。

「千冬の兄の織斑悠夜だ。これから一年よろしく頼む。」

ふう、これでなんとか先生も持ち直すだらう。あとは……

じ———っ

この張り付くような世紀の大天才東さんからの視線をなんとかでき
ればなあ……

「ねえ、ちーちゃんのお兄さんなんだよね？君は頭いいの？」
自由時間になつたらすぐ「これかよ。パソコン見ながら言われても、
なんて言つか、対応に困る。

「確かに俺は千冬の兄だが。お前は篠ノ之だったか？篠ノ之、人と
話すときは人の目を見て話せ。それが最低限の礼儀つてもんだ。そ
れができるないようなやつとは話したくはないな。」

「ふーん。じゃ、話して」

俺に向けられたのはまるでものを見るかのような冷たい瞳だった。
俺は千冬の付属品として視界には入っているけどまだ興味はないつ

てどうか……

「そりだな、確かに姿勢を正してくれたなら答えない訳にはいかないな。けど生憎質問には答えられないよ」

「どうして？」

「どうして？」

「頭の良し悪しは自分じゃなくて他人の評価で決まるんだ。だから俺には答えられない。それに俺は自分が頭いいなんて思えるような過剰な自信も持ち合わせていないからな」

自分で『俺超頭いい』なんて言つやつは変人と紙一重は天才か馬鹿だけだろ？。あいにく俺は性格が普通から逸脱してるとは思わないからな。

つて言つてもこんな会話してたら、

「ふーん。じゃ君は頭がいいんだね。」

「どうして？」

「だつて根拠を持つてしつかりと話せる園児つて頭いいと思わない？」

頭がいいように見えるよね……

「で？俺の頭がいいとどうなの？」

篠ノ之はさつきより少しだけ興味もつたような瞳でこちらを見てくる。けどその瞳には諦めのよしきな色が浮かんでいる気がする。一体どうし

「ねえ、君はこれを見て何かわかる？」そう言ひて篠ノ之は俺にパソコンの画面を向けた

その画面に映っていたのは幼稚園児にはあまりに難解な数式と正確な理論、詳しそうな設計図の数々で そして俺は篠ノ之が俺に向けた瞳の意味を理解した。

ああ、結局この子も同じなんだ、前世の俺と。ただ寂しかつただけなのか。理解してくれる友達がないなくて。

だったら俺がする事はひとつしかない。

「何だ、この式間違ってるじゃん」

そう、俺はよく普通の会話をするように間違いを指摘し、篠ノ之に

心の内で共感した。

俺も前は世界に、他人に見切りをつけ、勝手に絶望していた。

前の俺は独りだった。

……いや、独りだと『思い込んで』いた。

同じ年のみんなは俺が言つことを誰も理解してくれず、親でさえそうだった。

理解してくれる人がおらず、独りなのだと思い込んでいた。

けど、実際は違った。

何時も誰かが遊ぼう、と誘つてくれていたし、みんながしてるように、未だに舌つたらずな会話に混じつていれば楽しいかった。

なのに、無理やりみんなに理解できない会話をさせようとして、そのまま上勝手に一人ぼっちを氣取つて困らせていたのは俺の方だった。

そんな簡単なことに気づけなかつた俺は氣づいた時、みんなに申し訳なく思い、そんなことに気づけなかつた『馬鹿』な自分のことが悔しかつた。

だから、だから俺は篠ノ之内あんな寂しい時を過ごして欲しくないと思った。俺のように間違えて、後悔して欲しくないと思った。

俺が『頭がいい』と思つたのだろう篠ノ之は今度こそ嬉しそうな、本当に楽しそうな笑顔を、さつと初めての理解者であったのだからつ俺に向けていた。

「 なあ 篠ノ之。

お前はこれをやつていて楽しいのか？お前は知らないだけかも知れないけど、他のやつと馬鹿みたいなことして遊んだり、馬鹿みたいな話しさをするのも意外と楽しいんだぜ？だから

「

篠ノ之に言葉を挟ませないようひと息で言い切つた俺は『ここに何言つてんだ？』とこいつのような顔をした篠ノ之に

つてあれ？ちょっと待つた。

『ここに何言つてんだ？』とこいつのような顔をした？

「えっと 篠ノ之。今お前の周りにはあんまお前についているやつがないよな？お前、この状況をどう思つ？』

「どうしてそれは

「ちーちゃんとゆーくんがいるんだもん、最高に乐しこに決まつてんじやん」

篠ノ内……そんな無理やりな我慢なんて

うん、してないよね。これ单なる人嫌いだ。だつてめりやへりやこい笑顔だもん。

全然寂しさの裏返しとかじゃないわ。

うわ……クソ恥ずかしいんだが……何俺偉そひで説教じみたことしてんの? イツタイわ~

ハア……

「どしたの? ゆーくん」

「すまん篠ノ内……俺は(盛大な自爆で)立ち直れそうにないから千冬と遊んでいてくれ……あとゆーくんって何だ……」

「へ、よくわからぬ! けどゆーくんはゆーくんだけよ~。じゃあ末をくはちーちゃんと遊んで来るね」

ちなみに千冬は持ち前のカリスマを駆使して他の園児を先生以上にまとめてる。

あ、先生がいじける。

でも大丈夫ですよ先生。たった今篠ノ之が千冬のところに行つたから……ほら、篠ノ之が千冬に猛アタックして他のやつを蹴散らした。

出番ですよ、先生。

先生としてはよくない氣がするがなんか蹴散らされた園児を見た瞬間凄い笑顔になつたぞ……

そんなこんなで俺の一回目の幼稚園生活（先行き不安）が幕を開けた。

はじめのまほつ〜達人編・これで君もネクロマンサーだ〜（後書き）

ゆーくんは思い込みの激しいイタイ子~~~~~

はん(̄ ̄)

主人公はドリクエで言うかしこさが最大値の2乗くらいがあるので威力が半端ない感じになりました。

威力を調整する修行とかする予定です。

気絶はただの魔力不足。

多分そこら辺も修行します。

携帯で打つのとても疲れます。

ただ空いた時間に打つてるだけですからパソコンでできないんですよ。

……まあタイピングも遅いんですけど。

そんな訳で次回予告（笑）

長かった『あの』時間にとつとつ終止符が打たれる……

次回、『幼稚園卒業。そして伝説（笑）』へ

え？意味がわからない？

は（ry

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4393ba/>

I S Insincere・story ~ふざけたオリ主の転生録~

2012年1月13日20時48分発行